

## 「パワー・マップ」を作成するワークショップの提案 (2019年1月)

「わたしたちB」を形成するために地域の「パワー・マップ」[註-1]を描き出すワークショップは考えられないだろうか？

以前のコラム『コミュニティ圏からの熟議とコミュニティ圏をめぐる熟議』において、コミュニティ圏の熟議の『場』には「わたしたちA」と「わたしたちB」を形成する二つの異なる機能（正統性の創出と連帯の形成）があると書いた[註-2]。その際「わたしたちA」は、無作為抽出によるミニ・パブリックスによって、「わたしたちB」は、「パワー・マップ」の作成によって形成することが有効であることを前回提案した[註-3]。今回は、「パワー・マップ」を可視化するワークショッププログラムについて考えてみたい。

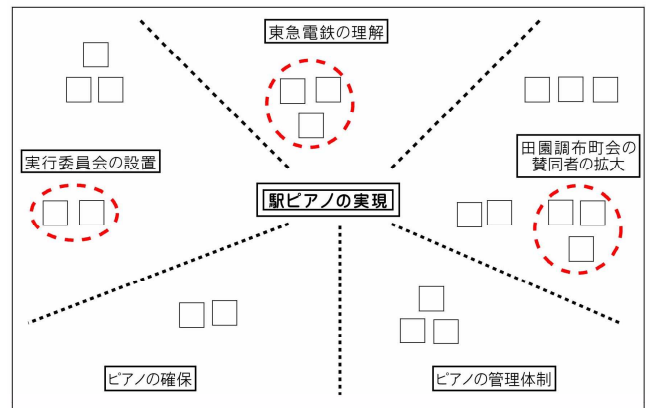
以前「住民参加型コミュニティ診断手法」[註-4]について提案したことがあるが、この「パワー・マップ」の作成もコミュニティ圏の共同主観性を形成するワークショップ手法の一つとなるはずだ。まずは、「パワー・マップ」作成ワークショップの手順を想定してみよう。例えば、最近の僕の関心事である「駅ピアノ」プロジェクトを進めるために必要な「パワー・マップ」の作成を目的としたワークショップイメージを考えてみるとどうなるだろうか[註-5]。

### 【「パワー・マップ」作成の手順】

- ①まずは目的を中心に書く
- ②次に目的を達成するために解決すべきいくつかの問題を整理し、解決すべき課題毎に領域を設定する
- ③問題領域毎に役立ちそうな人材を、ポストイットに書き出す
- ④その人材に期待される役割をグルーピングする
- ⑤「パワー・マップ」に書き出された人にプロジェクトへの参加を働きかける

地域の人的資源のレイヤ（関係性の層的構造）の全体構成を認識している人はいない。すべての人はコミュニティの中のそれぞれの位置から回りの人と自分自身との関係性を見ている。すべては相対的であり自分自身を中心において認識している関係空間はそれぞれに歪んでいるからだ。多くの人の認識を重ね合わせていくことで、生活課題を中心に置いた課題解決のための関係空間である「パワー・マップ」を視覚化し共有化することができるようになるだろう。地域外の専門家などの人材の情報については、

個人的な関係も含めて参加者毎に異なる情報であり、「パワー・マップ」にプラスアルファされる情報になる。それ故、このようなプロセスで作成される「パワー・マップ」には正解というようなものはない。あるのは、あくまでも共同主観的な暫定的な地域資源理解図である。この作業を何度か繰り返すことで効果的な「わたしたちB」を形成する戦略が「パワー・マップ」から見えてくるはずである。



註-1：ランドルフ・T・ヘスター「エコロジカルデモクラシー—まちづくりと生態的多様性をつなぐデザイナー」

鹿島出版会 2018.4

註-2：大久手計画工房コラム『コミュニティ圏からの熟議とコミュニティ圏をめぐる熟議』(2018.11)

註-3：大久手計画工房コラム『コミュニティ・デモクラシー(住民自治)を実現するコミュニティ圏の熟議の「場」』(2018.12.25)

「ある問題を解決するための親密圏的なコミュニティを形成するにあたり、人間関係や組織の関係、役割や問題関心を持った人々の存在などを洗い出し、新たなコミュニティ形成に必要な不可欠な参加者構成図を「連帯」のための「パワー・マップ」として作成することを提案しておきたい」

註-4：大久手計画工房コラム『「私」から「私たち」を生み出す二つのワークショッププログラムの提案』(2018.6.14)

註-5：大久手計画工房コラム『共同主観性について改めて考える』(2018.10.29)

## 熟議民主主義を巡る4つの指標

(2019年3月)

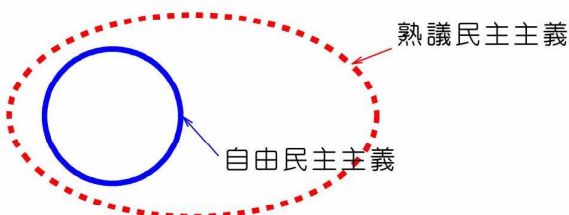
### 1. コミュニティに求められる民主主義

コミュニティを巡るリバタリアニズムとコミュニタリアニズムの問題は、古くから論じられているところではあるが、コミュニティにおけるデモクラシーの問題は、深く論じられてこなかったように思う。しかしコミュニティ・デモクラシーは、今後重要となるであろうコミュニティ・マネジメントを現実化していくにあたって、避けることのできない課題である。確かに、現在コミュニティの運営にデモクラシーが根付いているとは言えない。むしろコミュニティとデモクラシーはどこか相性が悪いと感じている人が多いのかもしれない。コミュニティの運営は一部の住民に閉じられている。あるいは多くの住民のニーズに答えていない。メリットが感じられない、自治が充分に行われているとは言えない等々。

昨今コミュニティに新たな自治的機能が求められているとしても、官僚的な運営がなされることを望む人はいないだろう。やはりそこにはデモクラシーが必要である。問題があるとすれば、コミュニティの運営を民主的に行うためには、手間と時間がかかるという懸念にどう答えることができるかであろう。民主主義はコスパが悪いという認識については、正月にNHKのBSで放映されていた「日本のジレンマ」でも議論されていた。しかし、そこでの結論は、この程度の議論の習慣しかない日本において、コスパを語ること自体おこがましいのではないかというものだった。

### 2. コミュニティと熟議民主主義の親和性

民主主義にもいろいろなスタイルがあると言われている。熟議民主主義の概念は自由民主主義の概念よりも広いとする見方は、従来の民主主義の捉え方に変化をもたらすものである。従来の議論は、自由民主主義をいかに熟議的に発展させるかという枠組みの中で行われていたと、田村は指摘している [註-1]。この20年ほどの間に中国を含む東アジアにおいて、様々なスタイルの熟議民主主義の展開と発展が見られるとする専門家の見解は興味深い [註-2]。



そこで改めてコミュニティ・デモクラシーを考えると、コミュニティと熟議民主主義の親和性は高いように思うのである。以前のコラムで、僕は「コミュニティを単なる地域内分権の制度として捉えるのではなく、熟議的デモクラシーの主要な舞台、市民社会の重要な政治的装置として位置付けるのである」と書いたことがある [註-3]。コミュニティと相性が悪いのは、自由民主主義的な部分であり、より広い概念である熟議民主主義という枠組みで考えると、コミュニティと熟議民主主義は親和性があると言えないだろうか。田村の指摘に従えば、コミュニティ圏は、「公/私区分という自由民主主義の境界線を乗り越える射程を生み出す」可能性を持った『場』であるということになるのではないだろうか。即ち、公/私区分を乗り越えるための装置としてコミュニティ圏を位置付ける、というのがコミュニティと熟議民主主義の親和性の意味である。

### 4. 熟議民主主義を巡る4つの指標

ここでは、コミュニティ圏における熟議民主主義を巡る4つの指標について検討してみたい。正統性、共感・連帯、決定プロセス、意見変容の4つである。これまでのコラムにおいて、コミュニティ圏における熟議の『場』には正統性の創出と連帯の形成の二つの役割があることを論じてきた [註-4]。正統性の創出については、民主主義の包括性を高める方法としてコミュニティ圏でのミニ・パブリックスによる（この場合は市民討議会）熟議の『場』を継続的に実施することを提案した [註-5]。共感・連帯の形成としては、「パワー・マップ」などの作成により、擬似親密圏的な「わたしたちB」を生み出す熟議の『場』の機能を提起した。ここに決定プロセスへの接続と意見変容の発生を加えて、コミュニティ圏の熟議民主主義を考える場合の4つの指標として提案したい。

コミュニティ圏の熟議民主主義を巡る4つの指標

	理念的課題	実践的課題
コミュニティ圏からの課題	正統性の創出 (包括性の確保)	決定プロセスへの接続 (実現性の確保)
コミュニティ圏をめぐる課題	意見変容の発生 (共同主観の形成)	共感・連帯の形成 (擬似親密圏の形成)

#### [正統性の創出]

ここでは民主主義の包括性が問われる。いわゆるマイクロ・マクロ媒介問題である。日本のような代表制民主主義（自由民主主義）においては、ハーバーマスの複線モデルを根拠として、非制度的な一般的公共圏としてのミニ・パブリックスの『場』における多様な意見形成による正統性の創出が期待されることになる。

[決定プロセスへの接続]

日本の場合、熟議の結果と制度的公共圏（議会）との関係を正式に位置付けることが難しい。しかし、行政の執行権への介入の可能性としてミニ・パブリックスの結果を決定プロセスへ反映させる可能性は拡大されてきた経緯がある。中国の熟議民主主義の発展は、決定プロセスへの接続が主たる動機となっていると指摘されている。

[意見変容の発生]

熟議の最も基本的な効用として、参加者の意見変容がある。このことによって合意形成の可能性が拓かれる。

[共感・連帯の形成]

コミュニティ圏の熟議の『場』を考えた場合、擬似親密圏的な関係性である「わたしたちB」の形成機能が期待されている。

これまでコミュニティ圏における熟議として検討してきたのは、今回指摘した [正統性の創出] と [共感・連帯の形成] であった。[決定プロセスへの接続] の問題は、行政の執行権限への介入として論じた [註－6]。[意見変容の発生] については、共同主観性という面から検討した問題である [註－7]。

註－1：田村哲樹「熟議民主主義の困難」

ナカニシヤ出版2017.5

註－2：Beibei Tang, Tetsuki Tamura, and

Baogang He(2018).Deliberative Democracy in East Asia: Japan and China(The Oxford Handbook of Deliberative Democracy)

註－3：大久手計画工房コラム『再帰性をキーワードにコミュニティ・デモクラシーを哲学する』(2018.3.26)

註－4：大久手計画工房コラム『「あなた」から「わたしたち」を生み出すコミュニティ圏の熟議』(2018.11.30)

註－5：大久手計画工房コラム『ミクローマクロ媒介問題について考える』(2016.1.21)

註－6：大久手計画工房コラム『行政の執行権に介入するためのミニ・パブリックス』(2017.11.21)

註－7：大久手計画工房コラム『「私」から「私たち」を生み出す二つのワークショッププログラムの提案』(2018.6.14)

## コミュニティ・マネジメントについて考える (2019年4月)

ぼく自身が以前まとめたドクター論文では、コミュニティを舞台に行うワークショップの参加者が形成する『場』をコモンズとして提起し、そのコモンズの発達段階を検証しようとした〔註-1〕。コモンズとコミュニティの関係については、曖昧なまま課題として残っている。

今回は、『場』のマネジメントという視点からコミュニティのマネジメントについて改めて考えてみたい。そこでの仮説は、「コミュニティは『場』の容れものである」という考え方である。コミュニティの熟議の『場』については、これまでもコラムの中心的テーマとして考察してきたが〔註-2〕、今回はコミュニティと熟議の『場』を経営論で提起されている「場のマネジメント」の考え方をヒントに考えてみようというわけである。その結果として、コモンズとコミュニティの関係についても自ずと整理されるだろう。

さて、コミュニティのマネジメントには、『しくみ』のマネジメントと『場』のマネジメントがあるように思う〔註-3〕。『しくみ』のマネジメントとは、コミュニティの組織制度を通してコミュニティをマネジメントするような視点である。一方で『場』のマネジメントとは、コミュニティの中に様々に発生するコミュニケーションの場に着目し、コミュニティをマネジメントするような視点である。

コミュニティをマネジメントするとは具体的にはどのようなこととしてイメージできるのだろうか？ 『しくみ』のマネジメントの視点では、コミュニティの中にどのような組織体が存在し、その組織を構成するリーダーや役員、会員が誰であるのか、そのヒエラルキーがどのように構成されているのかなどが関心の対象になると思われる。行政がコミュニティに対応する場合は、この視点で把握されるコミュニティの構造をベースとして行う各組織への対応そのものがマネジメントということになる。しかし、この総和が果たしてコミュニティのマネジメントということになるのだろうか。

一方、『場』のマネジメントの視点からは、様々な人が出会いコミュニケーションする『場』が関心の対象となる。『場』は、基本的にはその都度発生し消滅するプロセスであるので、コミュニティと『場』の関係は流動的である。この『場』を生み出し、それぞれを運営することの総和がコミュニティをマネジメントすることであり、コミュニティは、『場』の容れものとして認識されることになる。

伊丹敬之の「場の論理とマネジメント」では、『場』が成立する本質はマイクロマクロループの成立である

としている〔註-4〕。ここでいうマイクロマクロループは、以前考察したマイクロマクロ媒介問題においては、ワークショップの参加者の間で発生するマイクロマクロ媒介問題として整理したことと基本的には同じ問題のように思われる〔註-5〕。

さらにより広範囲のコミュニティ圏におけるマイクロマクロ媒介問題を解決するためには、マイクロマクロループで生成される『場』をできるだけ多くコミュニティの中で成立させていく必要があるということになるだろう。このあたりが『場』のマネジメントの視点を示唆するコミュニティ・マネジメントの要点であるように思う。

そのように考えると、コミュニティにいろいろのタイプのものであると整理するのではなくて、コミュニティはあくまでも容れものであり、いろいろなタイプの『場』がそこにあると考えるべきであるように思う。ここでいうコミュニティとは、地域コミュニティのことを想定しているが、以前書いたように「コミュニティも異種混合の集合体」なのであり、ネット上のコミュニティ等、最近よく言われているさまざまなコミュニティは、ここでいう多様な『場』の一つとして理解すべきであろう。

伊丹によれば、『場』の中には、連帯欲求と情報秩序形成（意見変容、合意形成）の二つの要素によって共振の波が発生するとされている。以前僕は、「熟議の『場』は振動する場であり、参加者はこの『場』で関係を与えられ、相互の関係性（共同主観性）が変容する」と書いた。そしてコミュニティの熟議の『場』には、「『わたし』を『わたしたち』へと信頼によって拡散し正統化する『わたしたちA』」と、「『あなた』から『わたしたち』を想像力によって連帯し形成する『わたしたちB』」を生み出す役割があると書いた〔註-6〕。伊丹のいう連帯欲求は、『わたしたちB』に、情報秩序形成は『わたしたちA』に対応する共振の波として理解することができる。

さらに伊丹は、「会議の進め方はさまざまな場のプロセスマネジメントの原型である」とも言っている。コミュニティの熟議の『場』はコミュニティに形成される『場』の中でも特殊なものであると言えるかもしれない。その意味で『場』の中でも熟議の『場』は、代表的なマネジメントの対象である。最初に書いたドクター論文の際に残された課題に戻れば、ワークショップの『場』で生まれたコモンズは、コミュニティに成立するさまざまな『場』の中の原型的なものとして位置付けることができるだろう。

話しを具体的なレベルに戻そう。コミュニティのマネジメントには、『しくみ』のマネジメントと『場』のマネジメントがあるとすると、僕たち玉川まちづくりハウスが取り組んできたのは、コミュニティに

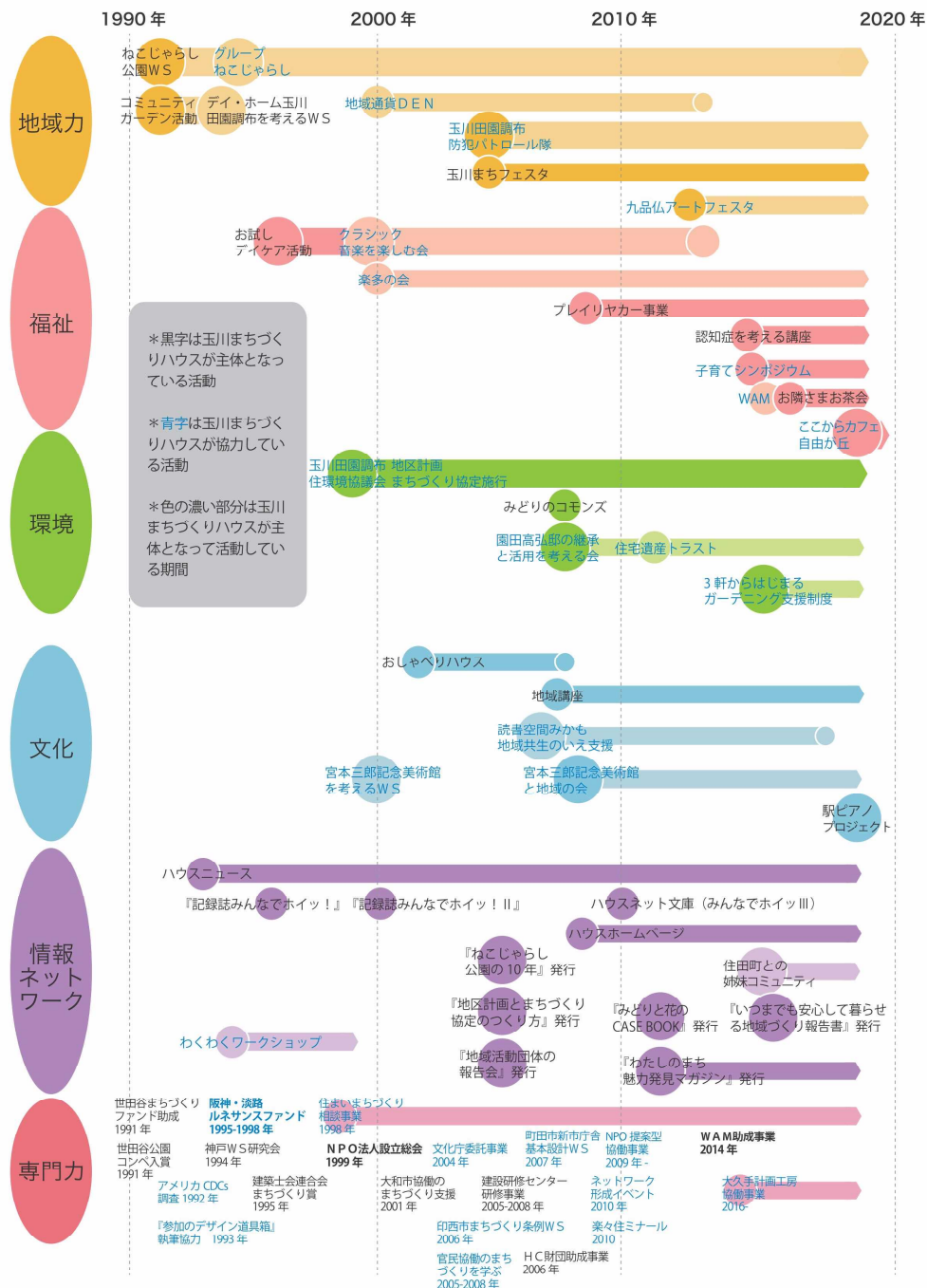


さまざまな『場』を生成し自己組織化するよう育て増やしていく活動であったということになる。玉川まちづくりハウスは、この30年間にたくさんの『場』をコミュニティの中に成立させるお手伝いをしてきた。『場』のマネジメントを担うのがコミュニティ・マネージャーであるとする、玉川まちづくりハウスの活動はそうした役割を果たしてきたのだといえるのではないだろうか。

註-1：伊藤雅春「建築・まちづくり計画における住民参加手法としてのワークショップの研究」～コミュニティの自律化をもたらす計画論～（千葉大学提出博士論文、主査延藤安弘教授）2001.3

- 註-2：大久手計画工房コラム『熟議システムを創発するコミュニティ政策の可能性と実践』（2017.11.9）
- 註-3：大久手計画工房コラム『「入れ子型熟議システム」をヒントにコミュニティ・デモクラシーを考える』（2017.7.25）
- 註-4：伊丹 敬之「場の論理とマネジメント」東洋経済新報社 2005.12
- 註-5：大久手計画工房コラム『マイクロマクロ媒介問題について考える』（2016.1.21）
- 註-6：大久手計画工房コラム『「あなた」から「わたしたち」を生み出すコミュニティ圏の熟議』（2018.11.30）

### 玉川まちづくりハウスの活動がこの地域で生み出してきたソーシャルキャピタル



## コミュニティを巡る3つのマネジメント (2019年5月)

前回のコラムで書いた「コミュニティは『場』の容れものである」という部分と、「コミュニティのマネジメント『しくみ』」「コミュニティのマネジメント『場』」の関係がわかりにくい、という指摘を頂いたので、この部分について再度考えてみたい。

以前のコラム『現代社会の存立構造』とコミュニティ』で僕は、市民社会（公共圏）とコミュニティ（圏）は異なるものとして整理した [註-1]。同時に、基本的にはコミュニティ（圏）も市民社会（公共圏）も種々雑多な他者によって構成されている、とも書いている [註-2]。市民社会とコミュニティ圏の違いはどこにあるかと言えば、コミュニティ（圏）は市民社会（公共圏）とは異なり、ある種の関係性（媒介的であり且つ対自的な社会性）を生み出すことが期待されているということだろう。それに対して、家族のような親密圏の関係性は、直接的であり即自的であるとされる。つまり他者性のない個人と個人の全面的な関係性である。

コミュニティ（圏）を市民社会（公共圏）から区別するためには、コミュニティ（圏）の中にいくつかの『場』を絶えず発生させることによって、対自的な（個人が全体から疎外されていると感じないような）関係性を維持し続けていくことが必要となる。これが即ちここでいう『場』の役割が、媒介的であるということの意味ということになる。以前のコラムで僕は、市民社会の媒介手段である「貨幣」に対置して、コミュニティの媒介手段を「討議」ではないかと提起した。今回、コミュニティが『場』の容れものであることの意味を再考するにあたって、この時提起した「討議」という媒介（コミュニケーション）手段の幅を少し広げて、『場』を媒介手段として捉え直したということになる。

つまり、市民社会の中にコミュニティを生み出すためには、『場』を媒介手段としてある領域（コミュニティ圏）に、対自的な関係性を生み出し維持し続けていかななくてはならないということになる。このことを「コミュニティのマネジメント『場』」と呼び、これがコミュニティが『場』の容れものであるということの意味として整理しておきたい。

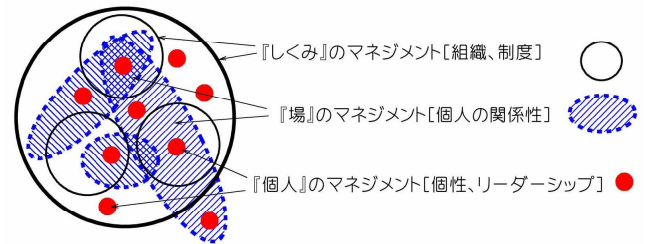
### ●コミュニティが多様であるということについて

最近、ここでいう『場』をコミュニティ（ノ：語尾を上げる）と呼ぶ傾向があるように感じている。しかし、容れものとしてのコミュニティ（\）の概念をとばして『場』そのものをコミュニティ（ノ）と捉え直すことには何となく抵抗を感じている。こ

の抵抗感の理由を考えてみるに、一つには、熟議民主主義の主要な舞台はコミュニティ圏にあると考えることによって、マイクロマクロ媒介問題解決のフィールドをコミュニティ圏に見出すことが可能になるのではないかという仮説を提起したいという思いがある [註-3]。二つ目には、コミュニティが『場』の容れものであるという考えを前提とすることで、コミュニティ・マネジメントを『場』のマネジメント概念 [註-4] を援用し展開することが可能になるのではないかという思いもあるからである。

コミュニティ（ノ）にはいろいろなものがあるという場合の問題意識は、むしろコミュニティ（\）をさまざまな『場』として捉える、即ちコミュニティを『場』に分解して考えようとするものの現れだと見ることもできるのではないかな。

コミュニティのマネジメントを『しくみ』と『場』と『個人』の三つの層に分けてその関係を図に表してみよう。



【コミュニティを巡る3つのマネジメント】

『しくみ』のマネジメントは、コミュニティの制度や組織などシステム的な視点である。『場』のマネジメントは、コミュニティの構成員の関係性の束、ネットワークなど生態系的な視点である。『個人』のマネジメントは、個人のリーダーシップや資質など個人に還元される要素的な視点である。

コミュニティを『しくみ』を通してマネジメントするという従来のコミュニティ政策の観点から、『場』のマネジメントという視点を手がかりとしてコミュニティ政策にアプローチするという観点があり得るのではないかな。『しくみ』のマネジメントは、コミュニティという器を可視化するような制度化、組織化のアプローチであり、『場』のマネジメントは、コミュニティ・デザインに代表されるような『場』づくりのためのエンパワーメントを目的としたアプローチである。

今回は、コミュニティは『場』の容れものであるという概念整理を通して、コミュニティ・マネジメントは3層のマネジメント概念に分けて考え得ることを問題提起してみた。

- 註－１：大久手計画工房コラム『「現代社会の存立構造」とコミュニティ』（2017.4.18）
- 註－２：大久手計画工房コラム『熟議システムを創発するコミュニティ政策の可能性と実践』（2017.11.9）
- 註－３：大久手計画工房コラム『再帰性をキーワードにコミュニティ・デモクラシーを哲学する』（2018.3.26）
- 註－４：伊丹 敬之「場の論理とマネジメント」  
東洋経済新報社 2005.12

## 「駅ピアノ」プロジェクトのその後

(2019年6月)

以前のコラム「共同主観性について改めて考える」の中で「駅ピアノ」プロジェクトを例に取り、共同主観性の形成プロセスについて論じたことがある〔註－1〕。

今回は「駅ピアノ」プロジェクト、その後の報告である。発起人会を3月にスタートさせたものの、東急電鉄との正式なパイプを作ることは難しく、実現への見通しを持ってないままに時間が過ぎていった。4月に入り、世田谷コミュニティ財団の一周年記念イベントの席で、顧問でもある渋澤寿一さんに偶然お会いする機会を得ることで事態が動き始めた。渋澤寿一さんは、渋澤栄一翁の曾孫であり、「駅ピアノ」プロジェクトのことをお話すると直ぐさま東急電鉄の役員の方につないでくださったのである。事態の進展を受けて、発起人会に名前を連ねた面々のML上の発言が俄に活気づき始めた。メンバーの一人からは、こんなメールをもらった。「『私』、が『私たち』になる、場は振動し、シンクロしていく、今、伊藤さんが提案された駅ピアノが、伊藤さんの熱意によって『私たち』になりつつある展開はとてもうれしく、希望が持てることです。」

妄想が個人の頭の中を出て、何人かの心に住み着き始めたことに感動している自分がいる。「駅ピアノ」というコミュニティ・アイデアは、今まさに僕の手を離れようとしているのだ。「この町でともに活動できる関係性を築き上げるために」今、「わたしたち」が生み出されつつあるように感じるのが何物にも代えがたく嬉しいことである。



「駅ピアノ」プロジェクトの提案

玉川まちづくりハウス  
伊藤雅香  
2019年5月26日

註－1：大久手計画工房コラム『共同主観性について改めて考える』（2018.10.29）



## 最近思うこと

(2019年6月)

### 1. コミュニティの鉱脈を掘り当てる

私たちの町では、長年地域医療を実践してきたお医者さんを核にした『地域ケアを語る会』という福祉・医療分野の人達の多職種交流会が2000年から毎月開催されている。最近になってこの会に関心を持ち、何度か参加させて頂いた。ケアマネージャーや訪問看護師・介護士、マッサージ師や鍼灸師など訪問活動を中心に実施している多職種に渡る人達が毎回入れ替わりながら大勢参加されている会である。先日は、かかりつけ薬局の薬剤師が講師の回であった。今回は、相続をテーマに税理士が家族信託について話しをされる予定である。

福祉、医療サービスが在宅に大きく舵を切る流れの中で、この会の参加者を見ていると多様な事業者のネットワークサービスによって地域が覆われていることを実感することができる。専門職の事業者として多くの人々が、入れ替わり立ち替わり高齢者を対象とした暮らしをサポートしている地域の現実がある一方で、地域コミュニティの運営に関わる人達(町会役員、民生児童委員、社協等)はこの場には参加していない。この事業者の人たちも、重要なコミュニティの構成員であるはずだが、普段のコミュニティ運営の場には見えてこない存在でもある。しかし、僕自身はこの会に参加して、地域の中に潜在していたもう一つの重要な鉱脈を見つけたような気がしている。

### 2. 「地域ケアを語る会」、「九品仏アートフェスタ」、「駅ピアノ」をつなぐ

コミュニティには様々な活動組織が重層的に存在する必要があると考え、玉川まちづくりハウスは意図的に多様な活動団体を地域の中に生み出すお手伝いをしてきた [註-1]。住民一人ひとりの関心事は異なり、地域の多くの人々が何かしらに参加するためには活動団体の多様性が必要だと考えているからである。

しかし、今回体験しつつあることは、一見関係のなさそうな団体に参加している人が偶然つながることによって新しい可能性が生まれるというワクワク感である。具体的に言うと、「九品仏アートフェスタ」の参加者が、田園調布の住民であることがわかり、「駅ピアノ」プロジェクトが必要としている駅周辺に広い人脈を持っていたり、「地域ケアを語る会」の世話役の一人が宅老所実現の夢を抱き、「九品仏アートフェスタ」の参加者で保育園事業に取り組んでいる人の夢と重なり合う可能性が生まれそうであったりするるのである。これはそれぞれの会の中だけで考

えていた時には気づかなかったことだ。いくつかの会の参加者をつなげることで、思いもかけない化学変化が起きる可能性が生まれようとしているのである。このようなことは、実ほどの町にもあることなのだろうと思う。しかし、地域の中の様々な活動を探り当てることもなかなか容易なことではない。それに加えてそれぞれに参加している人が秘めている可能性を発見し、つなげることはさらに時間のかかることである。

上記の事例にしてもすべて意図したことではなく、偶然飲み屋の『場』で結びついたことである。コミュニティにこうした『場』を臨機応変に作り出すことが、地域を耕すことであり、コミュニティをマネジメントすることだと改めて実感しているところである。

註-1：大久手計画工房コラム『コミュニティ・マネジメントについて考える』(2019.4.1)

## 「ニューヨーク公共図書館」を見て考えたこと (2019年7月)

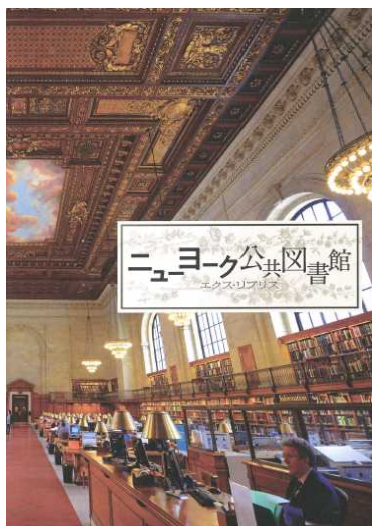
「ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス」というドキュメンタリー映画を見た。フレデリック・ワイズマン監督による205分という大作である。全編ナレーションもなく、48の活動シーンが次々と紹介されていくという構成である。相当な長さにも拘わらず不思議に飽きることなく見続けていられる映画であった。図書館という既成概念を前提としてみれば、多様な活動の幅広さに驚くことも多いが、図書館分館（ネイバーフッド・ライブラリー）は「コミュニティ・センター」として機能することであるというニューヨーク公共図書館の基本姿勢を理解すればそれも納得のいくことである。

ホームレス問題にどのように関わっていくかという幹部職員による会議シーンの中で「最終的にかえるべきはこの街の文化だ」という言葉は、玉川まちづくりハウスの活動のミッションを考える上で示唆に富むものだと感じる事ができた。話は変わるが、先日地元で些細なことではあるが嬉しいことが一つあった。毎月通っている診療所に玉川まちづくりハウスの活動記録「わたしのまち魅力発見マガジンvol.8」を何冊か置かせてもらっていたのだが、この活動のことを知っていて持って帰る人が多いので追加でもう何冊か頂けないかとドクターから依頼されたのである。こんな事は今までなかったことだったので驚くとともにようやくわたしたちの思いが地域に少し届き始めているのかなとささやかな喜びを感じたのである。

ところで、ニューヨーク公共図書館の分館が取り組んでいるような活動を玉川まちづくりハウスは、地域にあるいくつかの社会資源をつなぎながら実施しているのだと考えてみるとどうだろうか。例えば宮本三郎記念美術館と地域の会が行っている「ひとひろば」の活動は、ニューヨーク公共図書館の講座活動のようだ。そう考えると「九品仏アートフェスタ」の取り組みも「お隣さまお茶会」や「ここからカフェ自由が丘」、「プレーリヤカー」の活動もこの映画のそれぞれのシーンに重なってくる場面は少なくない。

そこで考えたのは、ニューヨーク公共図書館の活動のあり方とは反対に、わたしたちの地域では

玉川まちづくりハウスの活動に奥沢図書館を巻き込んでいくこともできるのではないかというアイデアである。そういえばもう一つ、ご近所の商店街にあるトバリエギャラリーで絵画鑑賞会をしようという提案もある。このように「わたしたちの街の文化を変える」という視点から、いろいろな可能性を広げるヒントをもらうことができたということが、この映画の私にとっての魅力である。



## 環境をコントロールする二つのプロジェクト －自分達で物事を進められると感ずること－ (2019年8月)

私たちのまちに現在二つのプロジェクトがある。一つは田園調布の駅に「駅ピアノ」を実現するプロジェクトである。もう一つは、環八通りにある駐車場のフェンスに描かれた「落書き消し」のプロジェクトである。

「駅ピアノ」のプロジェクトには、多くの人々が自発的に参加してくれ、今のところは順調に進んでいる。しかし、「落書き消し」のプロジェクトは、この夏の暑さもあって参加者を募ることも躊躇している有様で、まだ実施に至っていない。「駅ピアノ」のプロジェクトに関心を示す人と「落書き消し」のプロジェクトに関心を示す人の層は明らかに異なっていると思われる。



・幹線道路沿いにある駐車場の落書き

しかし、僕にとってこの二つのプロジェクトにはいくつかの共通点があると感じられるものになりつつある。どちらも他人の所有地に対するお節介ともいえる関与である。「駅ピアノ」プロジェクトは、駅という公共交通機関を運営する東急電鉄の所有地という意味では多少なりとも公共空間に対する関与といえるかもしれないが、「落書き消し」プロジェクトは、全くの私有地であり、所有者（企業）の許可を得て実施することとはいえ、お節介いという点では、よりラディカルなプロジェクトといえるかもしれない。その上で、自分達で物事を進められる、このまちの環境を自分たちでコントロールできるという実感を生み出すプロジェクトであるという共通点を感じるのである。

プロジェクトの実現性という点では、「落書き消し」プロジェクトの方が高いと思われる。しかし、「落書き消し」プロジェクトに多くの参加者を集めることは、「駅ピアノ」プロジェクトへの共感者を募るより、より困難であるかもしれない。どちらの

プロジェクトが結果として、まちを変えていくことに対して大きな意味を持ちうるだろうか。実現のプロセスとその後起きるであろうドラマを想像すると何とも言えないところである。現時点では「落書き消し」プロジェクトの方が伸びしろは大きいようにも思う。

その理由を考えてみるに、「落書き消し」プロジェクトには参加者ととともに一緒に汗をかくことができるという身体性がある。しかも結果は、「落書き消し」プロジェクトの方が明らかにわかりやすい。しかし、このプロジェクトは限られた人で実行するのでは効果が薄い、参加する人が多ければ多いほどよいのだ。その意味でどのように参加者を拡大していくかの戦略の問題が問われる。「駅ピアノ」プロジェクトは、プロセスもその効果もより抽象的である。その分より広範囲への伝達力を持つ可能性はある。プロセスにおいて仲間を増やす事も容易であり、むしろ結果よりもそのことに意味があるのかもしれない。

この違いを理解してこの二つのプロジェクトをマネジメントすることが当面の課題である。

## 『市民メガフォン』というアイデア

(2019年10月)

「選挙制を疑う」という本を読んだ。選挙型代議制民主主義に偶然型代議制民主主義を組み合わせることによって、より民主主義を豊かにしていくべきだという提案の書である。

大変興味深い内容なので是非読んでいただきたい。日本ではあまり紹介されないが、EUやヨーロッパ諸国では既に議会の一部にくじ引きによる代表選出制度を導入する議論が進んでいるようである。

その本の中で、ミニ・パブリックスの本筋とは異なるが、『市民メガフォン』という興味深いエピソードが紹介されていたので、そのことについて今回は考えてみたい。2011年秋にニューヨークのズコッティ公園で行われた市民集会で編み出された独自の方法らしい。以下その部分の引用である。「なかでも強い印象を与えたのが市民メガフォン (people's mic) である。拡声器の使用は禁止され、数百人が参加する集会でさえ、いっさいマイクを使わずに肉声で話された。誰かが発言すると、近くの人がその発言を繰り返す、その近くの人がまた繰り返す。メッセージが波のように一周するまで続くのである。人々は、決まった手振りで賛成か反対かを示したり、補足説明を求めたりした。集会には議長も議員団長もスポークスマンもいなかった。せいぜい、集会が上手く進むように管理する進行係が若干名いたにすぎない。」

ここで僕が関心を持ったのは、『市民メガフォン』がマイクやスピーカーを使わない大勢の人による伝達手段であるということと、人の言葉を口移しに伝えていくコミュニケーションの方法であるという点である。

おそらく何の拡声装置もなかった時代に、キリストの「山上の垂訓」のような説教が大勢の人に聞き届けられるためには、ただ聞くのではなく、発言を口移しに次々と繰り返しながら広がっていくような伝達方法がとられたのではないかと想像してみたい。これはまさに中動的な伝達の方法ではないか。一方的に聞くのではなく、自分の意見とは別ではあるが、自分の言葉で内容を繰り返す行為のプロセスに合意形成の秘密が隠されているのではないだろうか。

口移しのコミュニケーションについては、大学時代のゼミ合宿で行った議論のことが思い出される。最初の発言者の内容を繰り返し言い直しながら、自分の意見を付け加えていくという発言のルールは、短時間の議論にも拘わらず、思いもかけない論点の深化と共有化を生み出したのだった。熟議民主主義の反省性の実体化がここにある。

いずれも時間の流れをコントロールすることで実現できるコミュニケーションの成果なのだろうと思う。他人の言葉を自分の身体で繰り返すという時間を体験することから生み出されるコミュニケーションの有り様は、どこか熟議の本質を捉えているように思うのである。

## 「関係障害論」の視点からコミュニティ圏を考える (2019年10月)

三好春樹という人の「関係障害論」(雲母書房 2018.11)という本を近所の在宅医療に取り組んでいるドクターから紹介されて読む機会を得た。1997年に出版されて再版された本である。三好春樹氏の「関係障害論」によれば、人間は家族関係と社会関係と自分自身との関係の足し算ではなく、かけ算で成立しているとされる。かけ算の意味は、3つの関係の内どれかがゼロになってしまうと人格全体が崩壊してしまうということらしい。家族関係は、親密圏に相当し、社会関係は公共圏にあたる。親密圏の関係では、人はすぐには見捨てられることはない。しかし、親密圏の関係といえども危機に瀕することはある。公共圏の関係では、人の関係はビジネスライクに信用されるかどうかであり目的的なものである。社会関係は退職などで突然になくなることは往々にしてある。自分自身との関係は、アイデンティティ(自己同一性)やレゾン・デートル(存在意義)、プライド(自尊心)というような言葉で説明される関係である。

では、コミュニティ圏の人間関係とはいかなるものと考えられるだろうか。コミュニティ圏は、準親密圏或いは準公共圏というような中間的領域としても理解することもできるが、三好さんの3つの関係構造と重ね合わせて考えてみると、人はコミュニティ圏の中で自分自身との関係を育てる、或いは確認する存在であるということができないのではないだろうかと考えてみた。特に日本ではその傾向が強いと三好さんも認めている。つまり、コミュニティ圏では人間としての信頼が他者から得られるかどうかの問題であり、関係障害論の視点からいうと自分自身との関係が日常的に形成される場がコミュニティ圏ということになるのではないだろうか。以前から不思議に感じていたのだが、コミュニティの中で発生する他者との軽い挨拶やちょっとした触れ合いは、深い人間関係とは別の次元ではあるものの妙にうれしく感じられるものである。考えてみるに、これは他者との関係というよりは、むしろ自分自身との関係を形成するあるいは確認している側面もあるのではないかと考えてみるとどうだろうか。自分自身が存在していることを自分自身で感じられる、ある種の存在意義の確認のようなものといえるのかも知れない。これは不特定多数のたくさんの人に知られているというような承認欲求とも異なるものである。

そう考えると、先の「関係障害論」で言うところの人間であるために必要な3つの関係は、家族関係と社会関係とコミュニティの中で育まれる自分自身との関係ということになる。一人暮らしの高齢者には、

家族関係と社会関係の他にコミュニティの中で確認することができる自分自身との関係、具体的には挨拶程度の触れ合いで感じられる気遣われているという意識、他者を気遣う意欲などが必要であるということになるのだろう。気遣う意欲の対象は動物や人形、最近ではロボットなどということもあり得るかも知れない。

つまり信頼関係に支えられたコミュニティ圏には、自己の人格を維持するための役割もあるのではないだろうか。これはコミュニティができること、或いはコミュニティにしかできないことでもある。



## 在宅ケアネットワークと親密圏の熟議の可能性 (2019年11月)

以前、親密圏における熟議について触れたことがあるが、その時はまだ具体的なイメージを持っていたわけではなかった。[註-1] 今回、思いもかけず母が在宅医療を受けることになり、在宅ケアのさまざまな専門家の方のお世話になることになった。早々に司令塔となるドクターがメーリングリストを開設してくださり、家族を含めた訪問看護ステーションの担当者、ケアマネージャー、訪問薬剤師、訪問介護のヘルパーさんなどのメールによるコミュニケーションが瞬く間に始まった。入れ替わり訪問した人の報告がすぐさまメールで共有される。刻々と変化する母の容体の正確な把握もさることながら、未経験の家族にとっていろいろ心配なことが聞けたり、逐一の判断があたかも対話しながら合意されていくような安心感が得られることがありがたい。家族という親密圏で起きていることが、専門家とはいえ、開かれた場で議論される熟議の場がメーリングリスト上に成立していることに驚きを感じたのである。これは、まさに親密圏における熟議の場ではなからうか。親密圏の熟議の一つの具体的なイメージがここにあったのである。

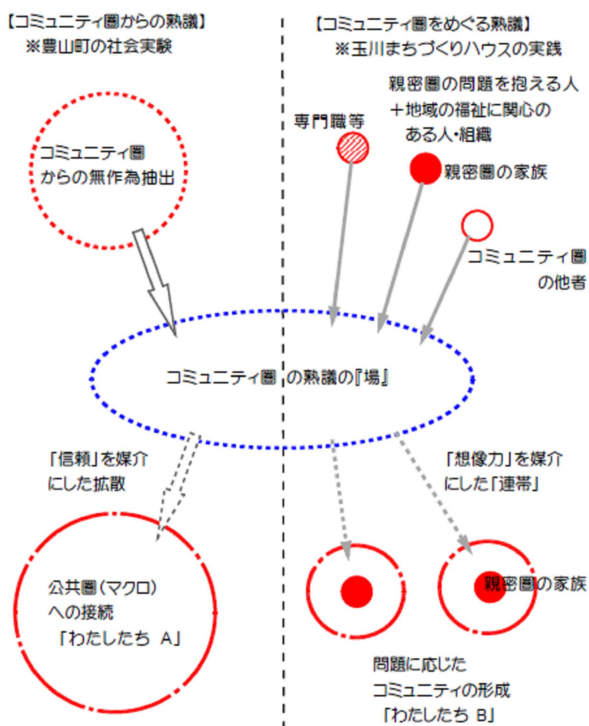
してきて頂いたことが随分と嬉しかったようだ。こうした方にも情報を共有してもらうことで、専門家にも家族にも用意することができないコミュニティ圏の関係が最後まで本人にもたらされるし、家族の支援にもなるように思うのである。[註-2]

これは終活の場面の一つの事例ではあるが、以前描いた図の「わたしたちB」のイメージの具体化であることは間違いなさそうだ。[図-1]

註-1：大久手計画工房コラム『「あなた」から「わたしたち」を生み出すコミュニティ圏の熟議』(2018.11.30)

註-2：大久手計画工房コラム『「関係障害論」の視点からコミュニティ圏を考える』(2019.10.24)

【図-1】コミュニティ圏における2つの熟議



これから先は、今は実現していない提案である。こうしたメーリングリストは、親密圏の家族と専門家によって構成されているが、ここに信頼のおけるコミュニティ圏の他者に参加してもらうのである。母の場合は、まだ元気な時に通っていたミニデイのボランティアグループのリーダーの方が話し相手と

## コミュニティの中で死んでいくこと

(2019年12月)

2019年11月に母が亡くなった。病気が発覚してから20日あまりの急な死であった。母は名古屋から東京に5年前に移り住んだが、ほとんど知り合いのいないこの地で「楽多の会」というミニデイの仲間ができ、コミュニティの中で最期を迎えることができたのだと思う。特に最期の在宅ケアのわずかな時間は、狭い家族の親密圏を支えてくれるものとして、コミュニティ圏というようなものを実感することができた貴重な経験になった。母の介護を通して、おしゃべりの場がどれほど大切な時間であるかということを知った。家族よりもよほど話を聞いてくれる人達に母が囲まれていたことをありがたく思う。

母にとってのコミュニティ圏は、「関係障害論」で言えば家族との関係以外に必要とされる社会関係と自身との関係をつなぎ止める『場』であったのだと思う。コミュニティの中で生きていく時間がなければ、コミュニティの中で死んでいくことはできない。わずか数年の時間ではあったが、人間として生きるためになくってはならないコミュニティ圏の時間を与えて頂いたすべての方に感謝したい。本当にありがとうございました。